

学校教育目標 (教育方針)	<p>強くたくましい心身や豊かな人間性と社会性を育むとともに、社会の要請に対応した高い専門性を有する人材の育成を目指し、一人一人が自己実現を果たすことのできる基礎的な能力と態度の育成に努める。</p> <p>1 社会の変化に対応し、地域産業の発展を担う人材の育成に努める。 (1) ビジネスや経済の諸活動を主体的、合理的に行い、経済社会の発展を図る総合的な能力と実践的な態度の育成。 (2) 情報社会で活躍できる創造的な能力と実践的な態度の育成。 (3) 人間としての尊厳の認識を深め、社会福祉の増進に寄与できる創造的な能力と実践的な態度の育成。</p> <p>2 豊かな人間性と高い倫理観を育み、積極的に社会に貢献できる人格の形成に努める。</p> <p>3 学習や部活動を通して、生涯にわたり健康で明るく豊かな生活が送れるよう心身の健全な発達に努める。</p>
------------------	---

3つの方針 (スクールポリシー)	どんな生徒を育てたいか 【GP】	<ul style="list-style-type: none"> ・ビジネスマナーを身に付け、商業の各分野について高度な知識と技術を身に付けるとともに、想像力豊かでビジネスの創造と発展に主体的かつ協働的に取り組むことができる生徒 (ビジネス科) ・デジタルクリエイターとして、Society5.0で実現する新たな社会において情報を活用し、情報に対する新たな価値を創造することができる生徒 (情報科) ・福祉に関連する職業に従事する上で必要な資質・能力を身に付け、より良い福祉社会をめざすため主体的かつ協働的に取り組むことができる生徒 (福祉科)
	生徒をどう育てるか 【CP】	<ul style="list-style-type: none"> ・「礼節と礼儀を大切にした商業人教育」と「商業の専門性を深める探究的な学び」を両輪として、経済社会で活躍できるように商業の見方・考え方を働かせた実践的・体験的な学びの推進 (ビジネス科) ・情報産業に関する事象について、主体的に課題を発見し、ICT機器を活用しながら科学的で論理的な方法で創造的に解決していくための探究的な学びの推進 (情報科) ・実践的・体験的な学習活動を行うことを通して学ぶ意欲を高め、福祉に関する課題を発見し、職業人として求められる倫理観を踏まえ、合理的かつ創造的に解決する学びの推進 (福祉科)
	どんな生徒を待っているか 【AP】	<ul style="list-style-type: none"> ・商業の諸活動に興味・関心があり、資格取得に意欲的に取り組む姿勢をもつとともに、経済社会に積極的に参画しリードできる人材になりたいと考えている生徒 (ビジネス科) ・情報科の学習 (プログラミング・映像制作・イラスト制作・アプリ開発・Webデザイン・ネット配信等) に深い興味・関心があり、その知識や技術の習得に努力を惜しまない生徒 (情報科) ・福祉に関して興味と関心をもち、将来の職業として福祉に関わる職業を希望している生徒 (福祉科) ・部活動や生徒会活動、ボランティア活動等に主体的に活動し、自己の成長や仲間とのつながりを大切にしようとする生徒

学校の抱える課題	<ul style="list-style-type: none"> ・VUCAの時代を迎え、答えのない問いに対して自ら考える力 (振り返る力)、粘り強さが希薄である。 ・目的意識や見通しをもてないために、学ぶ意欲が低い。 ・学習面等への意欲の低さから、自己肯定感、自己効力感がもてない生徒が多い。 ・さまざまな環境や事情から、自分と向き合おうとする姿勢がもてない生徒がいる。
----------	--

教育指導の重点	領域・分野	今年度の具体的な重点目標
	学習指導	専門学科で学ぶ意義を理解させ、専門分野の学習を深めさせるとともに、地域や産業との関わりを通して、専門的な知識や技能の定着を図る。
	進路指導	キャリア教育を推進し、激しい社会の変化の中で将来直面するであろう様々な課題に対応しつつWell-beingな社会の実現を目指し、社会人・職業人として自分らしく活躍することができる生徒を育成する。
	生徒指導	自己指導能力 (自ら判断、行動し、その結果に責任を持つ能力) を育成するとともに、将来において望ましい人間関係を築き、社会的自己実現ができる資質や態度を形成する。
	特別活動	学校行事や生徒会活動、部活動に主体的に参画することを通して、生徒の自己肯定感の向上を図る。

年度目標				年度末評価(自己評価)				
領域分野	3つの方針・具体的な重点目標の達成に必要な具体的な取組・方策	県教育振興基本計画での位置付け	達成度の判断・判断基準あるいは評価指標	取組状況・実践内容 評価項目の達成状況等	評価 A. B. C. D	成果と課題	総合評価 A. B. C. D	
学習指導	産業界、大学等との連携を通し、専門性の深化を図り、地域課題等に対し多面的に考察・分析し、課題解決に向けた提案ができる能力と態度の育成をする。	4	施策Ⅰ-4	生徒による授業評価アンケート 本校は、専門高校としての特色ある教育活動を実践している。→90%以上	<p>【教務】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校評価アンケート項目「ICT機器を有効に活用した授業が行われている。」82.5%の生徒が当てはまると回答している。これは、教職員のICT機器を活用した授業が実践されている賜物である。しかし、「確かな学力を育成するため、個の学習状況に応じたきめ細かな指導・支援を充実させる。」この項目については、今後より研究していく必要がある。 <p>【ビジネス科】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・フィールドの専門性を生かし、地域と連携した取り組みを行い、活動内容を発表することができた。 ・商業科目の基礎基本を定着させることで商業教育の土台をつくり、より高度な専門知識を習得できる授業を展開することができた。 ・ICT機器等を活用した授業を展開した。放課後等に補習を行い、生徒の学びの理解度を高めることに努めることができた。 	B	<p>【教務】</p> <ul style="list-style-type: none"> ▲学校評価アンケート項目「外部との連携を生かした教育活動に積極的である。」17.8%の生徒・27.5%の保護者等がわからないと回答している。連携を行っている学科だけでなく多方面に広報を実施する必要がある。 <p>【ビジネス科】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ふるさとを愛し地域に貢献できる人材を育成するために、地域や地元企業と連携した教育活動を実施することができた。地域等が抱える問題を考察し、解決するための手段を考える力をさらに育成していきたい。 ○複数の高等教育機関(大学・専門学校)と連携して専門知識を習得させることができた。今後も継続して取り組んでいきたい。 	
	確かな学力を育成するため、個の学習状況に応じたきめ細かな指導・支援を充実させる。	9	施策Ⅱ-9	「ICTを活用した個別最適な学び」における自主的な課題取組状況	<p>【情報科】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・調査から問題検討、プレゼンテーションの作成まで考える工程を実践する問題解決型学習をすることができた。 ・より実践的な学びができる学習環境の構築から指導の推進を実施した。 <p>【福祉科】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・施設実習や講習会等により実践的・体験的な学習活動を行うことを通して学ぶ意欲を高めた。 ・生徒の情報共有をこまめに行い、個別に指導が必要な生徒に対しては教員間で役割を分担し取り組んだが、生徒の習熟度差が大きく、評価基準等を検討する必要がある。 	B	<p>【情報科】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○課題研究における東海中央病院との連携学習においてデザインにおける社会問題の解決学習を実施できた。 ・厚生労働省及び公益社団法人エイズ予防財団における令和6年度「世界エイズデーポスターコンクール」において最優秀賞及び優秀賞を受賞した。 ○東海北陸ブロック血液センターが主催する「献血ポスターコンペティション」において岐阜県赤十字血液センター所長賞を受賞した。 ○愛知県印刷工業組合主催のポスターグランプリにおいて、特別賞における岐阜県教育委員会賞、岐阜県印刷工業組合理事長賞を受賞、協賛会社賞において株式会社タイガ賞など他にも5点が入選した。 <p>【福祉科】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○生徒の情報共有をこまめに行い、配慮が必要な生徒への対応が確実に行うことができた。 ▲介護福祉士養成校として授業時間数が定められている中で、授業カウント等を確実にを行い、教員の業務を簡略化し、生徒指導等他の業務に時間を費やせるように工夫する必要がある。 	
	基礎的・基本的な学力・技能の定着を図り、目的意識をもって自主的・主体的に学ぶ意欲や態度を育成する。	8	施策Ⅱ-8	生徒・教員による授業評価アンケート	<p>【専門教育】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域産業の担い手育成総合戦略事業にて、各学科で様々な地域に専門性を生かしながら取り組み、多面的に取り組むことができた。 <p>【かかみの未来プロジェクト】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・全校体制で三科合同の取組として、全学年・学科混合のグループを編成し、教員も学科や教科の枠を超え、ファシリテーターとして「探究活動」に取り組むことができた。 	B	<p>【専門教育】</p> <ul style="list-style-type: none"> ▲他学科の視点を取り入れた取組を行っていく必要がある。 <p>【かかみの未来プロジェクト】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○すべてのグループが成果をポスターにまとめ、発表することができた。 ▲探究活動の趣旨が徹底できず、議論を深めることのできないグループもあった。 	B

進路指導	インターンシップ・施設実習、外部講師による講話等を通して、望ましい勤労観・職業観の育成を図る。	1	施策Ⅰ-1	インターンシップ報告書や事前事後のアンケート調査	<ul style="list-style-type: none"> ・今年度インターンシップは、職場体験としてではなく、企業理念や社会での役割など探究的な学びとして80社のべ259名分の受入連絡を受け、ビジネス科115名、情報科10名の125名が2月3日～5日に61社に分かれて実施した。多くの地元企業にご理解・ご協力を願えた。 ・卒業後に公立高校商業助手、デザインの学びを活かして公立大学に進学、介護福祉士の資格取得を前提とした就職者など専門教育を活かした進学・就職が多数見込まれている。 ・外部講師を招聘した進路ガイダンスや講話を積極的に企画・運営した。 ・統計上は卒業後に進学・就職に該当しない生徒もいるが進路未定者はゼロの予定である。 	B	○12/6実施1年生進路ガイダンスの生徒評価は5件法で満足度4.23、発展性4.06と高く、意識付けになったと考えられる。
	専門教育の充実に努め、専門知識や技術を生かした進路実現を目指す。	14	施策Ⅱ-14	検定等の取得状況や、関連職種への就職・進学状況			○6/11実施3年就職希望者対象企業見学は98%の生徒が役に立ったと回答している。地元企業の理解が就職者増加にもつながったと考えられる。
	大学説明会、企業訪問等を実施し、情報提供に努めるとともに、キャリアカウンセリングの充実を図る。	13	施策Ⅱ-13	進路未定者の人数			○今年度は公務員・公立大学合格など挑戦する姿があり結果につながった。2年生にもすでに計画的に学びを進めている生徒がある。
	Well-beingを重視し、経済的利益だけでなく人と地球を大切にす価値観を育成する。	10	施策Ⅱ-10	インターンシップでの企業理念インタビュー報告書等			▲経済的理由等で急遽進路希望を変更する生徒が今年度もあった。生涯学び続けることを前提に、キャリアパスとして卒業時の進路を捉えることを指導しているが、現実認識の甘さが見られる。
生徒指導	基本的な生活習慣の確立と、生徒自身による規律意識の向上を図ることができるようきめ細かな指導・支援を充実させる。	1	施策Ⅰ-1	昨年度と比較した遅刻統計の確認	<ul style="list-style-type: none"> ・【一日の遅刻数平均4人まで】とする目標を掲げ、遅刻数の推移グラフを毎日更新し、全校生徒が毎日確認できるように可視化した。 ・生徒指導的、教育相談的な問題が疑われる場合、学年・学科・部活動・教科担任など様々な視点から即座に情報共有した。 ・問題が発生した場合、初動を迅速に取りかかり、問題の内容によって生徒には々々非々の姿勢で指導したり、気持ちに寄り添った解決の方法を探ったりした。 	B	○現時点（4月～12月まで）では「4.7人」となっている。昨年度同期間は、「5.3人」だったため、時間に対する意識、基本的な生活習慣の確立が向上できているのではないかと考えられる。
	組織的・多面的視点からの生徒理解が可能となるよう教員間で有機的な情報共有できる体制を整備し実践する。	3	施策Ⅰ-3	各種会議での横断的情報共有			▲担任・副担任・部顧問・教科担任などそれぞれの生徒と日常的に関わりを持つ教職員は、生徒をよく観察し、声をかけ、寄り添う意識を強く持つことを再確認する必要がある。地道な日常のかかわりが、問題の未然防止に繋がるということを、教員間で共通認識する。
	生徒が、他の生徒に対して価値ある存在として一人一人を認め合い、安心して学校生活を送ることができる学びの場を構築する。	3	施策Ⅰ-3	いじめ対策の徹底と教育相談との連携			
	生徒が発信するプラスの思いを全校で共有し、他者への気づきや思いやりを大切にす学校の雰囲気醸成する。	2	施策Ⅰ-2	多様なメッセージの発信			
特別活動	自身の役割や責任を果たし、もてる能力を生かしながら、生徒会活動や各種委員会活動を積極的に実施することを通して、学校づくりを支える意識を醸成する。	24	施策Ⅳ-24	生徒自身による企画の内容と割合 生徒会執行委員会・各種委員会の年間反省	<ul style="list-style-type: none"> ・今年度は、学校行事の運営等を生徒主体で実施することとした。生徒会を中心に、各委員会や部活動に役割を分担し、学校行事を実施した。内容によっては教員が介入しなくてはいけない場面もあったが、ほぼ生徒主体で学校行事を実施することができた。 ・「部活動ガイドライン」の範囲内で、部活動が活性化するように、各部の魅力や活躍の場を提供できるよう提案した。 	A	○学校行事の企画・運営を生徒主体で実施したことにより、生徒の学校行事に対する意識が変わったように感じた。また事後にアンケートをとり、次年度はさらにより良いものにしたいと意欲を見せる場面も多々あった。次年度はさらにブラッシュアップをし、より良い学校行事を生徒主体で創り上げていきたい。
	学校行事やクラス独自のLHRを、生徒自身で主体的に企画・運営できる仕組みに転換する。	20	施策Ⅳ-20	行事後のアンケート			
	部活動の活性化に加え、ボランティア活動についても積極的に取組むことにより、社会に貢献する意識の向上を図る。	25	施策Ⅳ-25	各部活動の活動状況及び実績 ボランティア活動の内容と回数			○伝達表彰や壮行会にて各部の活躍を紹介するなど、部活動の意識を高めるよう努めた。また、地域のイベントに積極的に参加するなど、活躍の場を広げた。
					▲部活動について、従来の考え方や意識が根強く残っている。教員も含めて現代に合った活動をするなど、アップデートが必要である。		

来年度に向けての改善方策等

- 【全体・教務】
- 地域社会（中学生・保護者・企業等）から求められている本校の役割が具現化できるよう、各分掌・学科・学年・部活動の連携をより一層緊密化する。
- 志願者数増加につながるよう、本校の魅力を最大限にアピールできる広報活動の強化を組織的に取り組む。
- 【ビジネス】
- 3つのフィールド・コースのそれぞれの特色を生かした授業展開（総合実践・課題研究等）を行う。来年度は2年生の教育課程にも課題研究が入るため、今年度同様来年度も探究活動に力を入れていく。
- 【情報】
- 地域にある各種団体や機関と連携した事業を通して、探究的な学びを継続する。
- 大学をはじめとする新たな進路先に対応できるよう、指導方法や体制、カリキュラムについて検討し、できるところから実践していく。
- 【福祉】
- 教育課程、各フィールドの科目の位置づけや福祉科として適切な連携対象を選別する。
- 生徒の進路実現につながるような講習会や行事の見直し、精選を継続して行う。地域連携を大切にしていながら帰属意識を高める。
- 【専門教育】
- 専門教育部の位置付け（組織的な対応を可能にする体制づくり）と業務の明確化、継続性のある地域連携（各学科における専門教育の特色を生かし、他学科との協働を通して、地域産業の担い手育成総合戦略事業を充実させる）を行う。
- 【かかみの未来プロジェクト】
- 今一度生徒に趣旨を説明し、自らの学びとして受け止められるように働きかける。
- 年間の回数を増やし、研究手法を学んだり、探究活動をサイクルとして回すことができたりするのに十分な時間を確保する。
- Manabaの活用など活動環境を整備したり、年度当初から中間発表や発表日を設定して計画的に進められるようにしたりする。
- 【進路支援】
- 外部講師を招聘した保護者向けの進路講演会を早期に実施する。
- 探究活動を活かした自己の進路検討など、自己を見つめる時間を充実させる。
- 【生徒支援】
- 指導のプロチャート化、クラス・学年・学科での指導・支援を分業化し、全教職員で生徒指導・支援する体制をつくる。
- 【特別活動】
- 学校行事について、生徒会を中心に生徒主体で実施できるよう、計画的に進めていく。
- 部活動について、時代に合わせた実施方法を模索し、柔軟な発想に基づき、生徒個々の満足度や自己肯定感を上げていく。

学校関係者評価

実施日：令和7年2月6日

- 学校のことをもっと外部に売り出すべきである。中学3年間だけで進路決定は難しいと思われるため、小学校からキャリア教育を行っていく必要がある。小学生にも、岐阜各務野高校ではどの学科でどのようなことを学べるのかを知ってほしい。そのための魅力の発信と体験が不可欠である。他市の小学校では、高校の行事でのコラボレーションや、総合的な学習の時間で高校生からのアドバイスをもらう交流等を行っている。例えば、課題研究発表会の参加や高校での日常の見学等が考えられる。
- 学校の魅力をホームページで紹介する際に、生徒たちがもつ映像制作の能力を生かすことができるとよい。
- 課題研究発表会における生徒による反省の中で「自分たちではここまでしかなかった」という発言があった。来年度の後輩が引き継いでいくような「つながりのあるプロジェクト」があってもいい。一回で終わらない、卒業生も参加し意見交換できるような機会があるとよい。卒業生から最新の技術を学ぶことも可能になる。生徒だけでなく卒業生や教員の刺激にもなる。これらの取組は、スクール・ミッションの実現につながる活動になる。
- ビジネスプランコンテストでは、1年間のプロセスの中で生徒たちに学びがあつてよかった。残念な結果となったチームもあったが、生徒たちは活動を通して多くの反省を得られたと思う。グループワークができる生徒だけでの取組ではいけない。生徒の役割分担が大切である。他責ではなく、自責で考えるマインドは本当に必須の能力である。
- 今の時代の生徒は、コロナ禍がもたらした閉鎖性によって孤独化し、孤立に慣れてしまっているため、迷ったときに他者に相談ができない傾向にある。それでも、常に声掛けを行い関わり続け、先に相談できるしくみが大切である。教員による多くの取組や、生徒に真摯に向き合う姿に感動した。
- 包括的に、いろいろなものを「ごちゃまぜ」にして学ぶことが大切である。異色なコラボレーションが何か新しいものを生み出していく。今後何を生み出していくかに期待する。

これらの提言や承認いただいたスクール・ミッションに基づき、地域の産業発展や活性化を担う人材の育成を目指して、地域や企業等と連携・協働しながら、主体的、創造的に考える探究的な学びを推進していく。